

2. 英語教育巻頭リレー・エッセイ

2011年2月

—大阪女学院大学「教職課程」から教職専修としてさらなる充実をめざします— 中井 弘一

2012年度から本学の教職課程がこれまでの選択増単位履修から、国際コミュニケーション専攻の中の専修課程へと位置づけられ、一定レベルの英語力を有し教職を希望する学生に実践的な英語授業力を養成する専門課程と生まれ変わります。英語教科教育科目も卒業単位として、教職を専門として学ぶ体制ができあがりました。2010年に生まれた本学教職課程は、赤ちゃんから2歳になり一人歩きができるようになり、ことばを発するようになりました。これからもさらに成長し続けていきます。

本学「教職専修」のねらい・到達目標は、「豊かな人間性と社会性を育む教育理念をもとに、英語教科指導法・教材開発の実践的な専門知識やスキルの着実な習得を図り、未来を担う生徒の教育に貢献する使命感のある英語科教員を送り出す」としてあります。

専修課程の教員養成理念として、

- ・実践的な英語科指導法をもとに授業デザイン力を身につける
- ・教材を見る視座・視野・視点を育成し、効果的な教材開発の基礎的な能力を身につける
- ・海外フィールドワークなどを通して、幅広い教育の素養を身につける

を掲げ、一層充実したカリキュラム内容を展開していきます。たとえば、2年生では韓国への教職フィールドワーク、3年生では履修要件を設定しますが英国への教職フィールドワークを実施します。これらのフィールドワークでは現地の中学校の授業を参観したり、それぞれの国の教育事情を見聞したり、現地での資料等を使った教材開発などに取り組んだりします。

本学の教職専修は、学校現場で実際に役立つ実践授業学に基づき教員養成に臨みます。「やる気を生み出す学習空間づくりに至る道筋を明らかにする」実践授業学が、これから一層求められる研究分野であります。「学習者」「教材」「授業者」「環境」などの授業の要素をしっかり分析・理解して適切な学習空間を生み出すプロセスの創出となる授業デザイン力を身につけ、教育の質を高める教員を輩出したいと考えています。

本学の教職専修への「信頼」をこれからも一層高めてゆきたいと思います。

3月

—韓国の英語教育に学ぶ— 東條加寿子

未だ寒さ厳しい韓国を訪れ、ソウル近郊のパジュ英語村に足を運んだ。アジア隣国の英語教育の実態を調査し広い視野から日本の英語教育について考えることを目指す、本学教員養成課程の新科目「教職フィールドワーク」企画立案のためである。

よく知られているように、韓国は国策として英語教育を推進している。韓国では1997年の第7次教育課程（日本の学習指導要領に該当）の告示を受けて小学校3年生からの英語必修化がスタートし、3年生で「聞くこと」「話すこと」4学年で「読むこと」5学年で「書くこと」と段階的に目標を定めて教科として教えられている。その結果、例えば、小、中、高を通して習得目標とされる語彙数は約8000語で、日本の中、高での3000語を大きく引き離している。テキスト本文の分量についても日本の2～4倍と言われる。そして、2008年李明博大統領による新政権が発足すると、日本円で約4500億円を投じてさらなる英語教育改革が推進されるに至り、国際的な競争力をつける上で外国語（特に英語）ができる人材の育成が不可欠であるとの国家政策の一端を担う。ちなみに、2011年度のTOEIC公開テスト受験者数は日本が約75万人であったのに対して、韓国は約210万人。2011年度公開テストの平均点は日本が576.9点（リスニング317.1点、リーディング259.8点）、韓国が633.8点（リスニング344.9点、リーディング288.8点）であった。

国策としての英語教育政策を背景に、韓国では2000年ごろから英語村が建設され、現在では国内随所に約30の英語村がある。パジュ英語村は2006年に開設した韓国最大の英語村の一つで、第3セクター方式で京畿郡が運営に関わっている。ソウル市内からバスで40～50分。一見、テーマパークかと思うほどの広大な敷地に欧米風の英語研修施設、参加者やスタッフのための寮、管理運営のための建物、レストランや店が配置され、自給自足的な英語空間を構成している。メインゲートでは空港の入国管理局さながらにパスポートを提示して“入国”が認められ、ここから英語仮想空間での英語漬けの研修が始まる。当英語村のジェネラルマネージャーから受けた説明によると、京畿郡の中学生は、正規の授業の一環として14歳（中学2年）のときに1週間、この英語村で英語研修を受けるとのことである。パジュ英語村はこの他に、小学生から大学生、社会人を対象とした英語研修や、英語教員を対象とした研修を国内外の参加者に提供している。筆者が訪問した際には、米国の某大学院との

提携によって、MBA コースに進学希望の留学生向け英語研修が 4 週間にわたって実施されていた。

目を転じて、同国の済州島では Global Education Jeju City の準備が着々と進んでいると聞く。欧米の大学を誘致して韓国の学生に“留学”させる巨大な仮想英語コミュニティの出現である。

私の研究仲間には韓国の教育政策を専門にしている研究者がたくさんいるが、彼らによれば、韓国における革新的英語教育政策は 10 年以上が経過した今、評価の時期に来ているという。韓国における小学校 3 年からの早期英語教育を初めとした種々の教育政策の成果と問題点は何か。日本の英語教育に多くの示唆があろう。先入観を持たず、韓国の英語教育政策の実態を学生と共にじっくりと見据えることのできる「教職フィールドワーク」にしたいと考えている。

予想に違わず、韓流ブーム・円高の影響でシーズンオフにも関わらず 2 月のソウルは日本人で溢れていた。韓国語を話さない筆者が英語で話しかけると、日本人とわかるや否や返答は日本語に切り替えられる。タクシーに乗っても、明洞の街角でも日本語で何とか事足りるのにはいささか驚いた。経済が言語を支配しているかのようだ。帰国直前、空港の売店の女性店員の日本語の流暢さに、思わず尋ねてみた。

「日本語はどれくらい勉強したんですか？」

「就職した時に 2, 3 カ月日本語を勉強しました。」

「2, 3 カ月でそんなにうまくなれるんですね。」

「はい、私はここに 18 年間勤めていますから。」

「...」

一個人が、仕事や生活の必要性に迫られて複数の言語を使いこなす「複言語主義」の一面を韓国社会の中に見た気がした。

4 月

— Seeking for knowledge and wisdom — 夫 明美

この冬は大変寒さが厳しく、大阪でも気温が一桁の日が珍しくありませんでした。いつの間にか天気予報で 0℃ 近い予想気温を見ても驚かなくなりました。まだ寒暖の差は多少残っていますが、木々や草花を見ても春が近づいていることが分かりますし、新しい季節が訪れるのが楽しみでもあります。

学校関係者にとって、春は別れと出会いの季節です。晴れやかな顔をした卒業生を送り出してまもなく、新生活への期待に胸を膨らませた新入生を迎えます。2011 年度をふり返り、個人的な回想ですが、自分自身の研究・教育活動において転機を迎えたように思います。まずは、単純に就職して 10 年が過ぎたという数字上の節目です。10 年前に住み慣れた大阪を離れて初めての土地へ移ったこと、そこから数回の移動を経て再び大阪にもどってきたこと、その間の数々の出会いと別れに思いをはせた 1 年でした。

また、かつての論文指導学生や留学時代の恩師と再会した際に色々なお話をして、自分のこれまでとこれからを見つめる機会になったように思います。以下にそれぞれのエピソードを紹介させていただきたいと思います。これらは 2011 年度初めに外部講師の先生のご講演でうかがった「知識と知恵の両立」という言葉に集約されるかと思えます。

所属学会でかつての論文指導学生と再会した際、懐かしい話に花が咲きました。現在は新進気鋭の研究者として活躍している方から、「先生はずいぶん厳しかった」という言葉が出ました。自分ではそれほど厳しく接している意識はなかったのですが、具体的なエピソードが出るにつれ、「なるほど、それは厳しいですね。」という共通の見解にいたりしました。自分なりにふり返ってみると、留学からもどり、キャリアをスタートさせたばかりの私にとって始めての論文指導生であったので、「自分の持つ限りの知識で指導したい」という自分中心の視点に立っていたように思います。

また、かつて留学時代にお世話になった恩師と再会した際には、「今後のキャリア」ということで貴重なお話をうかがうことができました。私が指導いただいていたころの先生の年齢に近づきつつある私に、「時代と時代をつなぐ役目として、次世代に何が伝えられるか」を意識させてくださるきっかけとなりました。もちろん、自分が個人として研究に尽力して、知識を蓄積することが前提であることは言うまでもありませんが、それを大きな時間の流れのなかで、今後の研究・教育にどのように役立てるかという、「俯瞰的な視点」を付加してくれました。また、現在の先生のお姿から、幸運にも今後のお手本を示していただいていることから、「本や論文だけでは得ることが難しい知恵」を得ることの重要性についても大いに感じさせられました。

2011 年度は、知識をつむと同時に、経験を重ねて知恵を得ることの意義を感じた 1 年でした。これから新生活に入る学生みなさんには、目の前の課題に一生懸命取り組み、時には失敗をしながらも、時間と経験を積み重ねることで失敗が自分の知恵となりえることがあることを忘れないでほしいと思います。また、時には書物を超えて、自分の身近なところから年長者や歴史と対

話することで、年代や時代を超えて享受される知恵についても知る機会をもってほしいと思います。

5 月

一連休のまとめー 中垣芳隆

今年は5月1日、2日の両日が休校となったおかげで8連休。広い野原に「ほら好きなように遊んでごらん。」と突然放り出された子どものような状態で何をしようかと思っているうちに無為に日が過ぎ日常生活に帰還しました。

30年以上も前の教え子たちの同窓会2つに顔を出し、「負うた子に教えられ」を今更ながらに実感。それぞれがいい中年のおじさん・おばさんに変身して、子どもの自慢に愚痴、日々の事柄から政治への不満・不信にいたるまで endless。

「首相がオバマ大統領と会談して、“日米の絆が深まった”とコメントしてたが、絆という言葉の重みが分かってませんな。先生どう思われますか？」ある調査では大阪の幸福度は全国順位でブービー即ち最下位から2番となっていますが、卒業生を見ると、何の大阪人の生命力は大したものではと思われました。

ちょこちょこ私事をかたづけ、連休の半分以上をTVと新聞のお守り、いやお守りをしてもらいながら見つけたいいニュースを1つ。

「子どもの貧困 教育で救う」「先生は学生、無料塾や相談」の見出し記事資本主義とは、より多くの富を生み出すと同時に富の偏在を前提とするシステムであり、格差を生み出すことをその本質とするとの定義に当て嵌めても、日本の子どもの6人に一人、推定323万人が貧困状態にあるとの推計を目の当たりにすると絶句。

そんな中、教育で貧困の連鎖を止めようと各地に学習支援の輪が広がりを見せているそうです。

滋賀県守山市で大学生のボランティア団体「アトラス」が活動を開始したのは4年余り前、厚生労働省によると、生活保護世帯の子どもに学習支援をする自治体はこの3年で7倍余の73自治体に増え、自治体以外にもNPO法人や民間団体が主催する学習支援が各地に広がっているとか。

アトラスのリーダーは、「子どもの貧困を知ってもらうことが第一歩。若者は気負わず支援している。貧困の連鎖をとめ、希望の連鎖に変えたい」と。

同窓会で顔を合わせた小学校の教員をしている教え子は、皆さまよくご存知の宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を子供たちに暗唱させているそうです。

「・・・東に病氣ノドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ・・・」

この人物、

「・・・アラユルコトヲ ジブンヲ カンジャウニ 入レズニ ヨクミキキシ ワカリ ソシテワスレズ」(補遺詩篇 雨ニモマケズ)と、よく見聞きし、わかり、忘れない聡明さを持っています。外に自分をどうアピールするかには無関心でも、聡明にものごとを理解し、判断できる人物です。

「あらゆることを自分を勘定に入れずに」ということも大事なことでしょう。人間の悲しい性といえればそれまでですが、自分の利益という意識が入ってくると人間の目は往々にして曇り、正しい判断を下せなくなります。

アトラスのリーダーの言葉と、生涯に亘り「幸せとは？」を問い続けた宮沢賢治の詩が通底しているように思われてなりません。

そういえば、学生時代に読んだ、ロシア貴族の出で、地理学者でもあり、革命家でもあったクロボトキンの「相互扶助論」の中に次の一節がありました。「動物学や、人間に関する諸科学は生存競争という容赦ない法則をいつも強調している。しかしそれらは、相互扶助の法則と呼んでも良い別の法則のあることを忘れていた。本来動物も人間も、自分たちが生きのびてゆくために、相互に結びつく術を知っている。」

6 月

一英語学習における「Google 革命」？ー 寺 秀幸

ついにこの日がやってきたかと思った。

A子が提出してきた人種差別に関するエッセイはほぼ完璧な英語で書かれていた。冠詞の使い方にやや不自然な部分もあったが他には文句のつけようのない正確な文法である。しかも、その文章は正確なだけでなく圧倒的な表現力をもっていた。日本語的な発想から抜け出た英語らしい表現がふんだんに使われていた。それは今まで私が指導してきた多くの学生の作文とは一

線を描く出来のものであった。

問題は、A子がつい一ヶ月前までは、他の多くの学生と同じように、日本語表現に影響された直訳的かつ文法的にもあやしいエッセイを書いてきたということである。いったいどのようにしてこのような劇的な進歩が起こったのであろうか。もしかしたら剽窃なのだろうか。それとも、なにか画期的な学習方法を見つけたのだろうか。

実は、私には、インターネットの普及にともないこのような現象がいずれ起きるのではないかという予感があった。そして、今回、A子本人から執筆過程の説明を聞かせてもらい、その予感が当たっていたことを確信するに至った。彼女の説明によると、今回のエッセイはアウトラインも実際の作文もすべて自分で書いたものだということであった。ただ、いつもと違い、今回は単語の使い方に自信がないときは徹底的に Google 検索を活用したというのである。

そのやり方は、こうである。まず、自分なりの英語で文章を作り、その後、自分の英語の使い方が正しいかどうかを Google 検索で丁寧に確かめるのである。たとえば racism という名詞がどのように使われるべきかを知りたいときは、この語を Google で検索する。そうするとネット上にある何万という用例がたちどころに集められる。あとは、そのなかから自分に合う用法を探し出して借用すればいい。

また、problem という語を修飾する適切な形容詞を見つけたいときは、「ワイルドカード」を使って“* problem”と入力する。すると、この語と共に起る修飾語がほぼ無数にリストアップされる。

このようにしていくと、この学生のように文型や修飾方法に関する一定の知識があり、かつ英語的な文章構成法を学んでいる者はたちどころに豊かで強力な表現力を身につけることができるのである。インターネットは膨大な英語表現を有するコーパスなのである。

しかし、問題は残る。これは本当の英作文と言えるのであろうか。学生が Racism is not a new problem, but it is a very important problem for us today. と書かないで Although racism is an age-old phenomenon, it is a problem of crucial importance in the contemporary world. と書いたとき、それは盗作にはならないのだろうか。また、たとえ許されるにせよ、このようなやり方で本当の英語力が身につくのだろうか。

このように考えると、インターネットは作文学習のあり方を根本的に変えてしまうかのように思える。だが、実際はそうではないのかもしれない。振り返ってみると、インターネット以前の「旧世代」の学生も同じようなやり方で英語を書きしてきたのではないだろうか。文の骨格こそは自分で作るが、辞書の例文を参考にして体裁を整えてこなかったのだろうか。『○○活用辞典』や『××語法辞典』を多用して正しいコロケーションを探さなかったのだろうか。「英作文は英借文」という言葉さえあつたではないか。Google は単に例文の数を途方もない数に増やしてくれただけなのである。

今後、A子のような方法で作文をする学生が確実に増えてくるだろう。多分、私たちはこの新しい現象を受け入れなければならない段階にきている。どのように受け入れ、どのように指導していくかを考えなければならない時期にきているのである。いや、むしろ、単に受け入れるのではなく、これを活用する方法を積極的に教える方がいいのかもしれない。これにより、次世代の若者は、今まではたやすく手に入れることのできなかった表現力を確実に身につけることができるようになるかもしれないのだ。

7月

一席卷する CAN-DO リストについての一考：グローバル人材育成が求められる中で一 中井 弘一

文部科学省の平成 24 年度の取り組みの一つに「英語力を強化する指導改善の取組」がある。グローバル人材育成の施策の一環である。この事業では、各都道府県に拠点校（中高各2校）を設け、新学習指導要領の着実な実施を促進するとともに、英語の使用機会の大幅な拡充やモチベーションの一層の向上を図る等の優れた取り組みを支援することになっている。取組には以下のことを含むことを求めている。

- ・「CAN-DO リスト」の作成と活用
- ・外国人教員、ALT、ICT の効果的な活用
- ・外部からの指導を受けながら授業実践の積み上げ

これに基づき、各都道府県でも、取り組み内容の一つとして「生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を、「CAN-DO リスト」の形式で設定・公表するとともに、その達成状況を把握・公表し指導に生かすこと。なお、「CAN-DO リスト」の内容は、外部検定試験等により把握した生徒の学習状況を踏まえ必要に応じて見直し改善を図ること」と拠点校には伝えられている。授業シラバスに「到達目標」を設定することが求められるようになって以来、教師がこれを指導するというだけでなく、生徒が授業で何ができるようになるかが問われるようになった。そして今、この CAN-DO リストの設定である。こうした動きはどこから

生まれ、求められるようになったのだろうか。日本の英語教育の学校現場は、果たしてこの movement に対応できるだろうか。

グローバル化という表現が早急な人材育成の根拠として金科玉条のようにかまびすしく使われているが、グローバル化とはどのように捉えられているのだろうか。文部科学省の国際教育交流政策懇談会の議事録に、『「グローバル化とは、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象ととらえることができる。特に「知」はもともと容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりをもつ。さらに「国際化」はグローバル化に対応していく過程ととらえることができる」^{注1)}と記載されている。そこには、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、製造業等の海外移転による国内雇用の変化をもたらしている」という経済的な危機感が反映している。地球市民になるためにというより、日本の国益のために競争できる人材を育成することが求められており、教育も哲学的普遍性を求めるより、実学実用的な知識・技能の習得が求められ、それを基盤として、「何ができるのか」という差し迫った要求に応えざるを得なくなっている。教育の成果を数値で示す狭い意味での学力が教育の全てであるという認識傾向が非常に強まったということであろう。

PISA の学力テストを実施している OECD が求められる人材として3つの key competencies をまとめている。①自律的に行動する能力(Act autonomously) ②社会的な異質の集団における交流能力(Interact in heterogeneous groups) ③社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(Use tools interactively e.g. language, technology)である。^{注2)}これらは国の教育行政にも大きく影響を与えている。文部科学省は、規制緩和の進む、知識基盤社会化が進む競争社会において、「自己の能力を發揮し社会に貢献するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である」としている。よって、新学習指導要領の根幹を成す理念は「思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむ」であり、そのための活用型の学習、課題解決型の学習や探究的な学習が求められている。言語の運用能力も必要な力であるが、なによりも「習得・活用・探究」がグローバル化対応の礎になるということである。したがって、1000語の文章を5分で読むことができるというような単なる言語能力を評価する CAN-DO リストでは用をなさない。

ところで、この CAN-DO リスト、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格として欧米で幅広く導入されつつある CEFR (セフアル) : Common European Framework of Reference for Language に関わりを持っている。言語を異にする民族が経済的にも文化的にも交流するヨーロッパにおいては、具体的な実力を示す評価が必要であるという状況があることを認識する必要がある。小池生夫は CEFR 創設の目的を、「欧州国家を形成するために、より多くの異民族間の広い交流が必要であり、現代語によるコミュニケーション能力をできるだけ多くの人々に持ってもらう必要がある。このためには、自己啓発も含めた現代語教育の重視が必要である。さらにコミュニケーションの効果的行動ができるためには学習者が必要な知識と技能を身につけるために必要な言語能力を総合的に記述する必要がある」^{注3)}と述べている。

ただ、CEFR の提案のなかに pluriculturalism(複文化主義)と plurilingualism (複言語主義)がある。これは Multiculturalism (多文化主義)Multilingualism (多言語主義)とは異なる。多言語主義は社会の中に複数の言語が併存し別々に使用されている状態、社会的状況を指すのに対し、複言語主義は、一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場で必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する状態、しっかりとした母語の基盤を持った成人がさらに L2 や L3 の能力を兼ね備え、相手と共有された言語によって文化差を乗り越えて意思疎通を図るという、「母語 + 複数言語」能力を持つ個人に意識を持っている。接する人の状況に応じて対応することが前提である。具体的には A1 (易) ~ C 2 レベル (難) があり、A1 レベルの簡単な description には、

Level A1 is the lowest level of generative language use – the point at which the learner can interact in a simple way, ask and answer simple questions about themselves, where they live, people they know, and things they have, initiate and respond to simple statements in areas of immediate need or on very familiar topics, rather than relying purely on a very finite rehearsed, lexically organised repertoire of situation-specific phrases.

- Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type.
- Can introduce him/herself and others and can ask and answer questions about personal details such as where he/she lives, people he/she knows and things he/she has.
- Can interact in a simple way provided the other person talks slowly and clearly and is prepared to help.

C2 レベルの description には、

Level C2 is intended to characterise the degree of precision, appropriateness and ease with the language which typifies the

speech of those who have been highly successful learners. Descriptors calibrated here include: convey finer shades of meaning precisely by using, with reasonable accuracy, a wide range of modification devices; has a good command of idiomatic expressions and colloquialisms with awareness of connotative level of meaning; backtrack and restructure around a difficulty so smoothly the interlocutor is hardly aware of it.

- Can understand with ease virtually everything heard or read.
- Can summarise information from different spoken and written sources, reconstructing arguments and accounts in a coherent presentation.
- Can express him/herself spontaneously, very fluently and precisely, differentiating finer shades of meaning even in the most complex situations.

とある。どちらにしろ、能力評価であり、あるひとつのことを成し終えることみる業績評価・達成評価でなく、何をどれくらいできるかという運用能力、ある状況のもとで何がどれくらいできるかという発揮能力を見ていかなければならない。潜在能力として保有している力では、ブラックボックスになり、評価者となる教員は判断できないこともある。どちらにしても評価は難しい。

目標として掲げるCAN-DOリストと評価としてのCAN-DOリストとは距離があるように思われる。つまり、到達目標・達成目標は、目標管理システムとして教員の方向目標として捉えられるが、CAN-DOは生徒の能力評価を意図している。また、欧米で捉えられるグローバル化と日本で捉えられるグローバル化にも差異があるように思われる。だからといって、このシステムは日本では受け入れられないと早急に判断するのも、その代替システムがない限り検討はされるべきものである。複数言語主義の観点を考えると、日本の中高生にも、English Nativeに近づく努力に明け暮れるのではなく、思考力・判断力・表現力を持って対応できることが求めていくべきであろう。すると、こうしたリストは思考力・判断力・表現力を育成する視点やグローバルな視点を培うために扱う教材内容やタスクなどの活動内容などを視野に編成されることになるのではないだろうか。それを基に評価の観点としてのループリックを構築することになるのではないか。

あと一つ課題は、授業を基にした評価は学校差があるが、文科省が進めるCAN-DOリストは日本人中高生を一つの基準で評価していきたいというねらいがあるようにうかがえる。授業以外の言語活動での評価は統一できるだろうが、各教員の指導に基づく授業の成果としての評価は一律に行うことが可能かどうかは検討する必要がある。

注1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm

注2) <http://www.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf>

注3) 小池生夫「CEFRと日本の英語教育の課題」英語展望2009年冬号

8月

— (続) 言語活動の潮流を読む：英語プレゼンテーション — 東條 加寿子

大阪女学院大学教員養成センターニューズレター第10号の巻頭エッセイで、『言語活動の潮流を読む：英語プレゼンテーション』と題して、プレゼンテーションが現代社会の言語活動の潮流に乗っていると書いた。ニューズレター発行日から6日後、ある新聞紙面で「ザリーダー 第5部 言葉が霧散する国」の連載が始まった^{注)}。連載は日本で「言葉の力」が失われている状況について考えている。

連載記事はまた、米国ではプレゼンを紹介するテレビ番組が登場し、雑誌では「伝える技術」「言葉の力」といった特集が途切れないと伝えている。やはりプレゼンテーションは今、ホットなテーマなのだ。これらの後押しを得て、ニューズレター巻頭エッセイの続編を書こうと思う。

連載で取り上げられているのは、iPS細胞の生みの親、京都大学の山中伸弥教授。IT界のカリスマ、スティーブ・ジョブズ。橋本徹大阪市長、国会議員小泉進次郎。毛沢東から習近平に至る中国指導者。そして人気アイドルグループ「AKB48」と、科学、ビジネス、政治および芸能といった様々な分野で活躍している(活躍した)古今東西の“言葉の名士”である。これらの顔ぶれを眺めれば、私たちは漠然とであるにしろ、「言葉の力」の意味を感じることができよう。

およそ言葉が力を発するには、二つの要素が不可欠であるように思う。一つは言うまでもなく論理性。聴き手には自分の意見を論理的かつ明瞭に伝えなければならない。しかし、日本では「以心伝心」や「阿吽の呼吸」を重視し、「物事をはっきり言わないことを礼儀とする価値観」がある。日本がプレゼン後進国といわれる所以である。

もう一つは情動的要素。言葉を使って人(の心)を動かさなければならない。残念ながら、この観点からも日本はプレゼン後

進国といわざるを得ない。連載記事によれば、日本語は、書道文化にみられるように「文字を話し、文字を聞く」という書き言葉の文化であり、歌を歌う際にも日本人は曲より歌詞の言葉に酔うという。一方、西洋文化は声で通じる声中心文化。声から発展した音楽やオペラが盛んであり、演説が人を動かす社会である。なるほど、プレゼンテーションは話し言葉によって人に情報伝える言語活動なのである。プレゼンテーションは論理で人々を説得するとともに、人々の心に共感を呼び起こし人を動かすことができる言語活動なのである。

連載記事によれば、山中教授は、講演会場が関東、関西と違えば話の調子を変え、必ず1回は笑いを取り、聴衆が一般人なら専門用語を一切使われないという。そしてこのプレゼン術は、アメリカ留学中に徹底的に叩き込まれ、その結果、山中教授はプレゼンには絶対的自信を持っておられるようだ。静かな口調の山中教授であればなおさら説得力がある。

論理的に意見を構成すること。話し言葉で情報や意見を伝達すること。聴き手に応じて伝える工夫をすること。聴き手と成果や感動を共有すること。プレゼンテーションは英語活動のエッセンスに満ちている。上述した日本文化論や「風土の違い」を勘案すれば、生徒たちが英語プレゼンテーションに取り組むにあたってはいくつかの言語文化的問題があるかもしれないが、裏を返せば、英語プレゼンテーション力が日本語の言葉の力に転移する可能性も大である。英語の授業で積極的な取り組みをしたいものである。

ここまで考えてみて、教師にとって授業は一つのプレゼンテーションではないかと思えてきた。そして、プレゼンテーションがうまくなりたいと思えてきた。

注)

産経新聞連載「ザリーダー 第5部 言葉が霧散する国」。2012年7月13日「後進国にくさび」、7月14日「言語力」最も重要な武器」、7月15日「一党独裁 失われた表現力」、7月16日「共感広げる泥臭さ」。

9月

— E lauhoe mai na wa`a (Everybody paddle the canoes together) — 夫 明美

2012年の夏も大阪では酷暑日が続きました。その熱を一層増したのが、7月末から約半月にわたってロンドンで開催されたオリンピックではないでしょうか。4年に1度の熱戦を観戦・応援するために、時差とも戦わなければいけない日々を過ごした方々も多かったと思います。本稿では今大会で競技選手から発せられた印象深いコメントについて振り返りたいと思います。

私自身が高校時代に水泳部に所属していたこともあり、競泳チームの大躍進は非常に印象的でした。オリンピック開催前から、平泳ぎの北島康介選手の3大会連続金メダルが達成されるかという点に大きな注目が集まっていました。

彼は、2004年のアテネ大会優勝時に、「超気持ちいい」という流行語を生みだしました。続く2008年の北京大会の2大会連続優勝時には「なんも言えねえ」という、安堵感と連覇を達成した感無量の気持ちが伝わるような言葉を残しました。残念ながら、本大会の個人競技時に彼が表彰台に立つ場面は見られませんが、水泳競技最終日にチームとして挑んだ400メートルメドレーリレーでは、4人で銀メダルをつかみ取りました。

レース終了後のインタビューで、第2泳者の北島選手は「自分の役割を果たして、後続のスイマーにつなぐ」と答えました。それを受けての第3泳者、本大会水泳チームの主将でもあるバタフライの松田選手が、「『康介さんを手ぶらで帰すわけにはいかない』とみなが話していた」とコメントを続けました。

水泳では背泳ぎ以外は水面上の景色を見ることが出来ないの（おそらく背泳ぎ選手も泳ぐことだけに専心していると思います）が、泳者は、自分や自分たちのチームの順位やチーム間の距離を知るすべがありません。一旦プールに飛び込んだら、文字通り、見えないライバルやプレッシャーと戦うしかありません。その中で、自分がこれまで積み重ねてきた努力を信じて、自分の役割を果たそうとベストを尽くすことを4人全員が成し遂げたのではないかと思います。

銀メダルという結果にも熱くなりましたが、お互いにベストを出し切ったと信じることから生まれる、相互の信頼感と尊敬やいたわりの念、また、これまでの水泳会をリードしてきた先輩選手への熱い思いに胸を打たれた明け方でした。

本稿のタイトルはカヌーをともに漕ぐことになぞらえて、チームワークを結集させることの重要性を説くハワイの格言よりつけています。最後に全文を引用します。

E lauhoe mai na wa a; i ke kā, i ka hoe; i ka hoe, i ke kā; pae aku i ka āina

Everybody paddle the canoes together; bail and paddle, paddle and bail, and the shore

10月

—組織のリーダーを考える— 中垣芳隆

例年になく残暑の厳しかった今年の夏ではありましたが、暑さ寒さも彼岸までとはよく言い得たもので、秋学期が始まって早や旬日、学生達も勉学モードに復帰し、キャンパスには活気と賑わいが戻ってきました。

今年前半、マスメディアで何度となく報じられた教育関係のニュースの一つに、大津市立中学校のことを始めとするいじめの問題があります。TVの画面に市長、教育長、校長と長という肩書きのつく人たちがよく登場しました。質の違いこそあれ、それぞれの組織を担うこれらの人々の、ものの言い振りや、挙措に、画面をご覧の多くの人が様々な感想を持たれたことと推測されます。

子どもの命にかかわる報道にかくれて余り大きく報道されませんでした。大阪府内の学校の今後に関わる「大阪府教育振興基本計画の策定に向けた中間まとめ」が8月に出されました。教育振興に関する3つの目標と目標実現に向けて取り組む項目が、小中学校の教育力の充実を一つ目として、十番目の私立学校の振興にいたるまで多岐にわたって記載されています。

紙をめくり読み進めてみれば、個々の事柄に特段の異論があるわけではないのですが、次の文章が目にとまりました。

「学校の組織力向上と開かれた学校経営」という中に、「府立学校長については、幅広く優秀な人材を任用してきたが、原則公募する新しい校長任用システムを生かし、内外からマネジメント能力等に秀でた人材の任用に努める必要がある。」とあります。

幅広く優秀な人材を活用してきたが、という飾りのフレーズは置くとして、大阪市の校長大量公募とタイアップしての、管理職人事への競争原理の一層の導入という現在進行形の施策についての記述です。ネットで調べますと、府立学校長20名程度の募集に対し、応募者は298名、一次合格者は、外部受験者62名、内部受験者104名に絞り込まれ、既に2次、3次の選考が終了し、年内に合格発表の予定とあります。民間人校長は大阪府においては2002年を初年度として、毎年、数名ずつ採用されてきましたが、人数が限られていることから、初期の目的がどの程度達成されたか不明なところがあります。今後は年々ボリュームが増すことから、府立学校全体に影響を及ぼすことが予測されます。

学校は「生きもの」とよく言われます。校長の器量によって元気にもなれば沈滞もします。願わくば「組織の体制や物事の手順」にのみに秀でた人でなく「自分のフォロワーに影響を与えることができる」リーダーシップを有する人が多く採用されて欲しいものです。

これまで長と名のつく数多くの人々を見てきましたが、部下が自主的にその人につき従い、指導を受け、その人のビジョンに従って行動する「リーダー」型の人から「組織のただ一番前にいる人」まで模様は様々でした。

限られて経験の中で、この人こそリーダーと感じさせていただいた人々には、次の共通点が思い浮かびます。

- ・「人を惹きつける人柄」・・・人徳ほど説得力のあるものはない。
- ・「良好な人間関係が築ける」・・・「適切な人たち」と「適切な関係」を築けること
- ・「胆力がある」・・・部下を信頼して仕事をまかす。最後の責任は自分がとる。
- ・「知識・情報」・・・将来に備えて事実関係や今後の動向を把握し、手を打つべきタイミング、ビジョンを考える力、
- ・「直感力」・・・部下のやる気、組織のエネルギーを機敏に察知し、バランスを取りながら人を動かす。
- ・「課題と格闘してきた経験と成功体験」・・・この人についていっていいのか、を判断するとき、それまでの実績ほど頼りになるものはない。成功を重ねる度に「その人の発する言葉」に重みが増し、信頼が高まる。

「改革」には賛否両論が常につきまといますが、大阪発として一步を踏み出す以上、大阪の府立学校が我が国の後期中等教育に新風を送り、リーダーシップを発揮することを期待したいものです。

11月

—ザ・厄介な英単語— 寺 秀幸

先生、*Osaka Station* にはどうして *the* がつかないんですか？

理論家のS子が聞いてきた。彼女によると、普通、「固有名詞＋普通名詞」の表現では、*the Yamato River* や *the Kanto Plain* のように *the* がつくが、*Osaka Station* には *the* がついていないという。その理由が知りたいというのだ。

ううん、どう説明したらいいものだろう。冠詞に関心を持つとは感心ですねえ、などといいながら時間を稼ぐ。

冠詞の指導は難しい。純粹に文法的な側面だけでなく、状況依存的な側面や慣用的側面も考慮しなければならない。考えてみれば自分自身も体系的に冠詞の指導を受けたことなどない。そういえば、高校の英語の恩師は「ここは各自読んでおくように」

とおっしゃって教科書の説明を省かれた。今となつてはそのお気持ちはわからないでもない。

一方、学生にとってはそれほど厄介な問題ではないようだ。メールのハートマークのように、ほぼ直感的に a や the を文中に放り込んでくる。そんな状況の中で、the に関する質問を持ってきたS子は絶滅危惧種に匹敵する貴重な存在である。なんとか答えてやりたい。

では、最初に確認しますが、the とはどんな働きをする語ですか。

えーっ、そんな基本から話すんですか？話し手が特定の物を指していることを表すしるしですよ。たとえば、*the book* と言ったら、「その本」みたいな感じで。

そうですね。ということは、*the Yamato River* という表現は特定の river を指していますからこれに the をつけることは英語の規則にそった標準的な言い方だということになります。この「the + 固有名詞 + 普通名詞」表現は、地名だけでなくさまざまな事柄を表す固有名詞として使われています。*the Meiji era, the World Cup, the Gion Festival* とかね。

だからあ、なぜ *Osaka Station* には *the* がつかないんですか。これは特定の駅を表す固有名詞じゃないですか。あつ、今気づいたけど、*Osaka City* とか *Osaka Prefecture* とかも *the* がつきませんよね。

そうですね。ほかにも、*Awaji Island* とか *Nakanoshima Park* とか *Osaka Jogakuin University* とかいっぱいあります。えーつと、S子さんは、なぜ *the* がつくものとつかないものがあるか、それが知りたいんですよ。実は、私も決定的な答えがないのです。

それでは困ります。

そうですね。いろんな考え方ができると思いますが、あえて言えば、一種の「純粋固有名詞化」のようなことが起こっているのだと考えています。

ジュンスイコニューメシカ？

本来、固有名詞には *Osaka, Mary, October* のように冠詞はつきませんよね。これに対し、*the Yamato River* などの「the + 固有名詞 + 普通名詞」の形はやや説明的な表現であつて本来の固有名詞ではないんです。いわば、「そのヤマトという川」みたいな感じなんです。

Osaka Station のようなある種の場所や組織を表す表現に *the* がつかないのは、おそらく、この説明性が薄れて、本来の固有名詞のように意識されるから *the* がなくなったのだと考えられます。

あ、信用してないようですね。a や *the* が消えて普通名詞が固有名詞化するというのは、珍しい事ではないですよ。たとえば、*mother* という語は普通、*a mother, my mother, the mother* などのように使うでしょう。ところが、家族の間でお母さんのことを話す時には “When is *Mother* coming back?” のように無冠詞で使えますよね。これってお母さんを表す固有名詞じゃないですか。

ふうん、じゃあ、なぜ、*Osaka Station* は固有名詞化が進み、*the Yamato River* は固有名詞化が進まなかったのですか。

えっ？それはその、つまり、具体性とか歴史的慣習とか色々な要素があつて、まあ、一概には言えないんですが…

あ、なんだ、よく知らないんだ。先生、また来るから勉強しといてね。

こうしてS子は帰って行った。冠詞の説明はいつも後味が悪い。日本語を母語とする教員がこれを教えることには限界があるとつくづく思う。だが、英語を母語とする教員が英語でこれを説明することも非効率的であろう。結局、論理的、背景的説明はこちら側の仕事なのだろうと自分に言い聞かせる。

12月

—正論はいつも正しいか— 中井 弘一

師走選挙が行われる。諸課題を抱える日本の政治に国民は希望の光を見いだせない状況があるように思える。様々な政党が乱立し、「私たちの主張こそが正しい」とか「こうすべきである」とかのようにポピュリズムを煽るような表現が入り乱れている。正論のように振りかざされるスローガンをそのまま信じて良いのだろうか。

正論とは、道理にかなった正しい意見や議論をいう。英語では、*a sound [fair] argument* という。英語を使っている社会では、コミュニケーションの目的がアーギュメントであり、「こちらの方が正しい」「こちらの方がベターである、なぜならば～」とその性格が対話的であるのに対し、日本の社会では、コミュニケーションが対話でなくモノローグで、自分の思いを述べるだけ、または状況を説明するだけに終始し、根拠に乏しい場合が多い。しかもアーギュメントを嫌う。たとえば、この正論という言葉が世間でよく使われる表現の一つに、「～の言っていることは正論ですが・・・＜以後否定文＞」がある。日本人は、正論という表現を使いながら、このように伝えることで否定を少しでもやわらかい形で伝えられればと思う傾向がある。そのせいか、逆に「正論」と思われて進められていく施策や活動に対して、それが本当に正論かどうか確かめずに、物言わぬフォロワーになっていることが

ある。英語教育においても、そういう「正論」が振りかざされていることはないだろうか。

大津氏が『英語学習 7つの誤解』（生活人新書、2007）に取り上げている誤解の中に、「留学すれば英語は確実に身につく」「英語はネイティブから学ぶのが効果的である」がある。国際科を設置する高校や英語コミュニケーションを売りにする大学などでは、「夏季にオーストラリアへ留学」「アメリカで4週間学びます」などの短期研修をアドミッションの宣伝としてとりあげているところがある。確かに英語の環境で過ごせば、英語を話す必然性が生まれるので、結果として英語を話し、それが上達につながると言えるかもしれない。また、ネイティブから英語を学ぶとすると、生の英語を通して学ぶので英語をしっかりと聞き、英語で答えるので英語学習に最適であると言えるかもしれない。しかし、大津氏が誤解と指摘するように、そうだと鵜呑みにできるものだろうか

これらに共通していることは、状況の設定やそのレベルなどが明示されないまま、あるひとつの現象を捉えているに過ぎないことである。留学しても、いるだけで努力をしないで勝手に英語が伸びるものではない。語学留学などでは日本人同士になることが多く、結局現地では日本語を話すことがある。たとえ現地での生活を通して日常会話を行う英語のレベルが身につくとしても、日常会話程度の英語が話せるようになるために留学するというのでは、本来の留学目的とすべき「学識を拓げる」には到底近づかず、値打ちのない留学になるのではないか。「英語はネイティブから学ぶのが効果的である」にしても、たとえば、日本語を自由にこなせる私たちが、外国人に日本語の指導をうまくやれるかと問われれば、おそらく「ノー」と答えるように、言葉が話せることと指導とは異なり、指導法や教材開発力など様々な教育知識がなければ効果がないことは、逆を考えれば明確になることであろう。

現在の動向に目を移せば、全国に拠点校を募り文科省が押し進めている「英語力を強化する指導改善の取組」の中の“can-do”評価も、英語教育における「正論」の範疇に入るものであろう。拠点校における主たる取組実施内容は、CAN-DOリストの形式による学習到達目標の設定・公表及び達成状況の把握・公表及び指導への反映（外部検定試験等により把握した生徒の学習状況をふまえた、必要に応じた見直しを含む）である。確かに他にも、授業における指導と学習評価の改善等の推進（4技能を測定する評価方法を含む）やALTやインターネット等のICT等の効果的な活用（授業内外において生徒が英語を使う機会を増やすことに資する取組）も取組課題としてあげている。しかしながら、「CAN-DOリスト」の形式で技能別に設定した学習到達目標の達成率が現場を一本槍のように貫いている感がある。

この“can-do”評価の推進は、グローバル化への対応を意図して、国際基準 CEFR（セファール：ヨーロッパ言語共通参照枠）（Common European Framework of Reference for Languagesの略称）の影響をかなり受けている。CEFRとは、ヨーロッパ各国の人々が共通のスタンダードでことばを学ぶために、2001年に開発された言語学習のガイドラインで、現在では世界に広がろうとしている。NHKの英語学習番組や英検も Can-do 評価を取り入れた。ちなみに英検2級の Can-do リスト「読む」では、「まとまりのある説明文を理解したり、実用的な文章から必要な情報を得ることができる」を規準とし、その具体的な内容として「一般向けに書かれた説明的な文章を理解することができる（旅行者向けのガイドブックなど）」「実用的な文章（How toもの）を理解することができる（料理のレシピ、ガーデニングなど）」「日本語の注や説明がついた英字新聞で、興味・関心のある話題に関する記事を理解することができる（週刊 ST/ Asahi Weekly など）」「簡単な内容であれば、まとまった量の英文の要点を理解することができる（講義や研修での課題図書や資料など）」「簡単なチラシやパンフレットを理解することができる（商品の値段、セールの情報など）」「1つのパラグラフ（段落）において、主題文（段落の主題を伝える文）と支持文（主題文を支える例など）の区別をすることができる」としている。

こうした“can-do”評価を学校教員はすぐに行うことができるであろうか。評価とは何かがまず問われているだろうか。指導と評価は一体という。目の前の生徒に授業を行い、その成果として生徒がどの程度理解しているかを診ることが本来の評価で、その趣旨は更に生徒の力を伸ばすために行う教育活動であろう。生徒も教師も、振り返りを通して学習や指導の現在地を知ることが大切であることは言うまでもないことである。だが、評価のために評価があるのでは、その効果は薄れる。全体と比べての個人の英語力を測定することがいけないとは思わないが、学習の成果を生徒個人にフィードバックする本来の評価活動とバランスを持って活用されるべきであろう。

また、“can-do”評価の推進が英語教育だけに進められている施策を鑑みると、英語科の評価の枠組みが他教科と切り離されて考えられているのではないかとも思える。“can-do”評価で、つまりき具合を含めた学習者の成長過程を本当に診ることはできるのだろうか。学校現場の先生は評価のための観察や試験作成に追われ、一層忙しくならないだろうか。教材の読み込みを通して、受け持つ生徒への効果的な指導教材を作成する時間がとれるであろうか。こうした“can-do”評価の開発や研究は、研究所、大学、文科省がじっくり時間をかけて開発したり、費用がかからぬようにまた学校現場の教員に負担にならない工夫を考えたりすることが必要であろう。

正論は常に正しいものか、しっかりと考える必要がある。生徒に「思考力・判断力・表現力」を育成することが肝要であると

言われているが、学校の先生も「思考力・判断力・表現力」を磨き、複眼的、批判的に思考する力が求められている。

2013年1月

—新年一考： 知の伝承を忘れかけた学校— 東條 加寿子

新年を迎えた。新しい年に際して、地球温暖化や人口問題などの地球規模の問題や日本のエネルギー問題を考えるにあたっては、「これから30年先には・・・」といった中長期的な未来を展望することが多い。一方、子どもたちや若者の教育の問題は、未来を担う人材の育成という観点からは確かに未来を展望する問題には違いないが、教育の現場での実践は現在に軸足を置いた日々の地道な活動である。その「現在」は未来を展望すると同時に、「これまで」としっかりと繋がっていなければならない。過去と現在を繋ぐ知の伝承。ともすれば価値が希薄になりつつある教育における知の伝承について考えてみた。

先日、好著『古典を失った大学——近代性の危機と教養の行方』（藤本夕衣著、NTT出版、2012）に接した。教育学研究者の藤本は、本書の中で大学の価値を古典を読む場として捉え直す試みを展開している。京都大学教授 佐伯啓思は「古典軽視 大学改革の弊害」（産経新聞、2012. 11. 19）と題した論説の中で同書を引いている。佐伯は、「時代感覚が違う」という理由から古典が読まれなくなったことを憂え、その背景として、大学改革で「社会に出て役立つ学生をつくる」ことを基本方針として、ひたすら「専門的知識」を重用し、短期的で可視的な成果主義を迫ってきたことを挙げている。両氏によれば、古典とは「人々の共有する価値」であり、「社会の規範や世界の見方などを模索する際の規準」であり、人間が生きることに関わる普遍的な「大きな物語」である。そして、佐伯によれば、今や古典は権威を失い、すべてが相対化され、「何でもあり」の時代となっている。

これらの議論の中で「古典」は「専門的知識」に対しての「教養」と同義に論じられており、大学教育の中で「古典」すなわち「教養」が今一度見直されなければならないという主張がなされている。ここで「古典」を「知・知識」に置き換えて考えてみると、学校教育の中ではほぼ同様の議論ができるのではないかと思う。ゆとり教育は、知識偏重からの脱却を掲げ、子どもたちの主体的で創造的な学びを追い求めたものであったに違いない。情報が氾濫する現代において、主体的に情報を取得し、創造的に考え、問題を解決する能力を養うことを追い求めたものであったに違いない。そしてその結果、伏線として、権威的な知識の伝承に対する否定的な態度が埋め込まれたのではなかろうか。

基本的知識基盤の（欠落とまでは言わないまでも）弱体化は、現在、初等教育から高等教育に至る教育の現場での最大の問題であると筆者は考えている。相対的にものを考えるためにはまず、「大きな物語」すなわちコンテキストを持たなければならない。創造的にものを考えるためには自己の確立や価値観の確立が不可欠である。自律した主体性は、しっかりと知識基盤の上にごそ築くことが可能である。数学の定理や物理学の理論、世界の歴史や地理、言語構造（文法）の基礎知識は学校教育の中でこそ、しっかりと伝授されなければならないことを、今一度しっかりと捉え直したいと思う。

新年に際して人々は未来を展望するが、あえて「古典」の重要性に思いを馳せてみた。2013年という「現在」がよい年になることを祈りながら。

3. 書籍紹介

2月

節分が過ぎると立春である。また春の季節がやって来る。意を決して、新しいことに取り組んでいかなければならない。何をやり遂げるかは、今のあなたが何を信じ、あきらめずにがんばるかによって決まる。これからも、

様々な出会いがあるだろう。川の流れのように、ゆっくりと進むこともあるだろうが、急激な流れで進んでゆくこともあるだろう。ただ、先へ先へと進んでゆく。水は常にもとの水ではなく、変化し続ける。あなたも変化し続けてゆく。人生においては、その変化こそ価値がある。その変化を彩るには、あなたの中にたくさんの引き出しを用意して、その引き出しから、これまで経験したことや出会った人や本のことをいつでも取り出せるようにしておくこと、そしてこれからも出来るだけ多くの経験や人、本と出会うことである。それがあなたの信じる力を大きくする。あきらめないで、前へ進む勇気と知恵を与えてくれる。